【書評】

伊藤寿朗『ひらけ、博物館』

[Book Review] ITO, Toshiro (1991), *Hirake Hakubutsukan (Open Museum)*

犬塚　康博
INUZUKA Yasuhiro

要旨　本稿は、伊藤寿朗『ひらけ、博物館』の意味を、博物館発達史に内在するものとしてとらえ返そうとするものである。本書で披露される地域志向型博物館と第三世代の博物館は、それぞれ1970年代と1980年代とに獲得された博物館論である。本書は、博物館のサブカルチャー化、大衆文化化によって特徴づけられる1990年代初頭に登場した。しかし、博物館を教養主義に位置づけ、サブカルチャー、大衆文化としての博物館と自己とを峻別するにとどまった。また、「受け身」でない「積極的」で「継続的な利用者（リピーター）」とそれを可能とする博物館を主張したが、それは教養主義的な理想からの演繹であり、人と物、博物館の多様な体験を内面化することはついに目指されなかった。これを不可能とした本書の博物館論は、棚橋源太郎、藤山一雄、木場一夫、鶴田総一郎と続いてきた博物館という観念の終わりをも意味することになってゆくのである。

はじめに

『ひらけ、博物館』の著者伊藤寿朗は、1991年３月29日に長逝した。その９日前の発行日をもつ本書は、生前の伊藤が直接に関与した最後の著書である。伊藤と有縁の人たちのあいだでは格別の思いが本書に生じることになったが、そうした事情とは無関係に本書は広く読まれてゆく。「岩波ブックレット」という形式が、この事態を第一に約束していたのだろう。さらに、自身の博物館論の普及を企図したと思われる、「ひらけゴマ」をもじった書名も功を奏したようだ。

世のなかでどのような読書がなされたのか、詳細は不明である。しかし、学芸員資格を取得するための講座受講生が本書を携行して、ある博物館を訪れることがあった。本書に収録された「あなたのまちの博物館チェックシート」［伊藤　1991：49］に依拠しながら、学芸員に聴きとり調査をおこなったのである。ひらいていない博物館に対し、「ひらけ」と求める主旨からつくられたアンケート調査をおこなうのであるから、怖いもの知らずと言うか無謀と言うか、予期せぬ来訪者に、閉じてきた博物館は少し揺れた。

その学生にとって本書は、授業や単位に関係する実益の書、しかも軽便なそれであった。しかし、大手出版社の市販図書が、博物館に展示されることがらの参考書であることはあり得ても、博物館そのものの参考書となることは、特殊なケースを除いて以前にはなかったと言ってよい。そもそも類書がなかったこともあるが、本書は博物館の大衆化の流れに棹さすものであった。

ポップな展開をしたからなのか。本書への批評は、必ずしも十全におこなわれてこなかった感がある。もちろん、「ひらけ」と命じる本書であるからプロパガンダによく用いられ、そうした紹介なら多くあったがすでに記憶の外である。本稿は、刊行後17年が経とうとす

るいま、あらためて『ひらけ、博物館』とは何だったのかを問い、博物館史に位置づけようとするものである。

流行と博物館論

1990年代は、博物館のサブカルチャー化、大衆文化化が急速に進行した時期であった[犬塚　2007]。その初期に登場した本書には、博物館のサブカルチャー化、大衆文化化の反映がみられる。

本書の冒頭で伊藤は、「東京・目黒区の自由が丘駅近くに、「ミュージアム」がある」［伊藤　1991：２］と書きはじめる。自由が丘チルドレンミュージアムのことを記し、同様に「「ゴルフ・ミュージアム」」［伊藤　1991：２］「「博物館通り」」「「博物館の町」」［伊藤　1991：３］と、博物館やミュージアムの語句を冠した事例を列挙する。さらに語句にとどまらず、「博物館学芸員を主人公にしたコミック」「ある大手百貨店の年間テーマは「ミュージアム」」［伊藤　1991：３］と、ことがらとしての博物館の援用についても触れ、「いま、博物館はトレンドなのだ」［伊藤　1991：３］とくくる。

伊藤が掲げた諸現象は、博物館のサブカルチャー化、大衆文化化の一端とみなしてよいだろう。しかし伊藤は、これらに対し冷ややかなのである。自由が丘チルドレンミュージアムを、その「「コレクション」は、フリルのついたDCブランドのこども服、パステルカラーのタイツ、エナメルのくつやビーズのブローチ、銀の食器、ベビーリング……」［伊藤　1991：２］と長々と書きながら、「「こどものものがいろいろそろう、こども文化の発信基地」という意味で「博物館」なのだそうだ」［伊藤　1991：２］とにべもない。かと言って、自由が丘チルドレンミュージアムが博物館であるかどうかに言及するわけではない。もちろん、同じページのコラム「博物館とは？」を参照すればこれが博物館でないことは明らかである。とどのつまり、「「博物館」「ミュージアム」と聞いて、あなたは何をイメージするだろうか。たとえば、「博物館行き」に代表されるような、カビ臭いイメージ。だとしたら、時代遅れだ」［伊藤　1991：２］を導くために、現在の流行現象を引用しただけなのだ。

博物館のサブカルチャー化、大衆文化化が進みゆく時代のはじまりにおいて、『ひらけ、博物館』は同時代的にそれらを内面化するかのごとく見せかけながら、それをおこなってはいない。さらに見ていこう。

博物館論の視覚化

本書には、写真図版が多用されている。これは、本書以前の伊藤の著作にはなかった手法であり、注目してみたい。これによって伊藤は、第三世代の博物館、地域志向型博物館の何を視覚化せんとしたのか。

たとえば、「「うまくいくかな」――おばあさんに教わりながら千歯こきを使い、稲の脱穀に挑戦する女の子（名護博物館）」［伊藤　1991：１］のキャプションをもつ表紙写真には、人（「おばあさん」と「女の子」）と物（「千歯こき」）との交渉が表象されている。裏表紙の写真もまた、「「動いた、動いた」――歴史生活資料所在調査員の主婦。昭和初期のお菓子自動販売機「のんきなとうさん」を、資料として掘り出し、記録する。この機械は、たばこ屋さんの蔵に眠っていた（豊島区立郷土資料館）」［伊藤　1991：１］というキャプ

ションとともに、人（「主婦」）と物（「お菓子自動販売機」）との交渉を表象する。

本文中に挿入された８点のうち７点はこれと同じ構造の写真であり、博物館の機能―「収集・保管」「調査・研究」「公開・教育」によって説明できる。前掲の裏表紙写真は、潜在性も含めて「調査・研究」と「収集・保管」である。同様に、「「どんな種類の植物かな」――採集した植物の名前を調べ、標本にする。市民と学芸員が調査・研究したデータは博物館の資料となる（平塚市博物館）」［伊藤　1991：29］と「まちの中の自然――河口のヨシの原でヒヌマイトトンボを採集する川崎市市民自然調査団。工業地帯はすぐそこだ（川崎市青少年科学館）」［伊藤　1991：35］も、「調査・研究」「収集・保管」である。

前掲の表紙写真と「「へぇ、こうやってつくるの」――モチゴメをひいてこね、香りのつよいゲットウの葉に包んで蒸し、鬼モチをつくるこどもたち。旧暦12月８日の鬼払いの行事に使う（名護博物館）」［伊藤　1991：31］は、参加・体験型事業の場面で「公開・教育」に属す。「「うわぁ、ふかふかだ」――パンフレットで生態を学びながら、モルモットやウサギを抱いてみる（埼玉県こども動物自然公園）」［伊藤　1991：17］も体験型の展示であり、ここに加えられる。

同様に体験的な「公開・教育」であり、美術館の一群としてくくられるのが、「身近な素材に表情を与える――ハサミを組み合わせてかたちをつくるワークショップ（宮城県美術館）」［伊藤　1991：20］、「「ひんやりしてるね」――都会育ちのこどもたちには土の感触が新鮮だ。こども向けワークショップ（世田谷美術館）」［伊藤　1991：21］、「土と話す――市販の粘土での造形とは一味違う。粉遊び、水を加えてどろんこ遊び、そして練り続けて粘土遊びをするワークショップ（宮城県美術館）」［伊藤　1991：59］である。

市民の学芸員化

これらが、視覚化された第三世代の博物館、地域志向型博物館である。博物館に関する書であるにもかかわらず、写真の焦点は物ではなく人に絞られている。では、ここに登場する人たちはいったい何か。

先述のとおり、写真は博物館の機能によって説明可能な光景であった。「学芸スタッフが登場し、資料の調査・研究、収集・保管、公開・教育の学芸活動が始まる」［伊藤　1991：14］のが第二世代であり、これを「市民の参加を運営の軸とする」［伊藤　1991：14］ところに第三世代がある。したがって、ここに登場するのは、各機能に対し何らかのかたちで「参加」する人たちであり、しかも各機能に対して「受け身」［伊藤　1991：14］ではない「積極的」［伊藤　1991：16］な人たちとなる。

さらに伊藤は、「第二世代から第三世代への転換のカギになるのは、継続的な利用者（リピーター）を重視するかどうかである」［伊藤　1991：15］と書く。上記の人たちが、「継続的な利用者（リピーター）」となることをも可能とする博物館が第三世代だと言う。「継続的な利用者（リピーター）」とは何か。ここで忘れてはならないのは、第二世代であろうと第三世代であろうと「継続的な利用者（リピーター）」の最たるものが職業学芸員だということである。物を前にして、職業学芸員もほかの人（利用者、学芸員有資格者など）と等しく利用者であることを出発点とし基礎とする。かろうじて制度が、職業学芸員をほかの人と分かつに過ぎない。「市民の参加を運営の軸とする将来の博物館像」［伊藤　1991：14］たる第三世代とは職業学芸員のメタファーでよく理解することができ、市民の

学芸員化と言ってもよい。平塚市博物館と川崎市青少年科学館、豊島区立郷土資料館の写真は、このありようを端的に表象していただろう。

博物館＝「知的」

写真にうつる人たちは、みな、何かしら、勉強するようすを呈していた。市民の学芸員化とは、教養主義でもある。先に、金子淳の言う「市民」に対し「ハイカルチャーや教養主義に親しいかもしれない」[犬塚　2007：155] としたのと同様の印象を受ける。

さらに今回、これらは「知的」と言いかえることができる。伊藤は、冒頭の「トレンド」について、「博物館は、落ち着いた空間、確かさと高級感のある知的空間として、雑誌などでデートコースとして紹介されている」[伊藤　1991：2-3] と言い、「ある大手百貨店の年間テーマは「ミュージアム」。博物館のように、知的、文化的な刺激を客に与えよう、というわけだ」[伊藤　1991：3] とも言った。ここで伊藤は、博物館を「知的」なものであると社会がみなしていているから博物館が受容されるとする。しかし、実は社会が博物館を「知的」なものとみなしているかどうかここでは不明であり、明らかなのは、博物館を「知的」なものと伊藤がみなし、それが社会の博物館受容の理由に投影しているということである。

これに導かれると、第二世代の「知的好奇心、探求心」[伊藤　1991：14]、第三世代の「知的探求心」[伊藤　1991：14] をはじめ、第二世代も第三世代もともに「知識」[伊藤　1991：15；16] を前提とし、地域志向型博物館もそうでない博物館も「知識や技術」[伊藤　1991：33] を前提としていることに気づく。第一・第二世代と第三世代との違い、地域志向型博物館とそうでない博物館との違いは、「知識」「技術」と人との関係のありようにあり、いずれも「知的」であることには変わりないのである。

理想の人たち

ところで、「博物館」と「知的」とをキイワードにして想起するのは、赤松啓介である。開館まもない国立民族学博物館を批判して赤松は、「「知的」市民との連帯とはどういうことなのか、年額一万円の会費を払えるような振興会々員だけが知的市民で、千日前や道頓堀の見世物小屋、全ストのカブリツキを楽しむような下劣な者は、市民に価しないということなのだろうか」[赤松　1977：161] と書いた。この二項が本稿では、「知的」な博物館における、「「受け身」ではない「積極的」な「継続的な利用者（リピーター）」と、そうでない人たち」となる。「そうでない人たち」とは、取り急ぎ「国立歴史民俗博物館の企画展示で「展示されている仮面をそっちのけにして、メキシコの仮面によく似たおじいちゃんとその家族に関する噂話について花を咲かせはじめる」[橋本　1998：545]市民や、北名古屋市歴史民俗資料館の常設展「昭和日常博物館」見学で懐かしい気分にひたり嬉々とする市民、新横浜ラーメン博物館へ行きラーメンを食べ満腹感の市民」[犬塚　2007：154] の例示でよいだろう。つまり、「勉強するようすを呈」さない人たちである。

もちろん伊藤は、「人びとのさまざまな利用スタイル」[伊藤　1991：15] と言い、「そうでない人たち」を無視することはない。「関心の薄い人をこそ対象に」[伊藤　1991：14] することも指摘する。しかし、その分析や理解には及ばない。そう言えば伊藤は、本書冒頭に掲げた諸現象を内面化することなく、導入に用いるだけだった。同様に、博物館にか

かわる人たちのようすを視覚的に示したが、そこから伊藤の博物館論が帰納されるわけではなく、地域志向型博物館および第三世代の博物館から演繹された光景が点綴されていた。伊藤は、人びとのようすには終始立ち入らず、人びとを地域志向型博物館、第三世代の博物館に動員するばかりなのだ。これが、本書における伊藤と人びととの関係であり、両者ともに教養主義の理想としてあったことにも気づかされるのである。

博物館という観念の終焉

「最近、平塚市博物館などの活動に触発される館がふえて、「地域博物館」の用語が、流行となってきた。「その地域の資料を中心に集めているから、地域博物館」「県内をサービスエリアにしているから地域博物館」という位置づけ方をする県立博物館も登場しており、用語の意味が混乱している」［伊藤　1991：26-27］と伊藤は書いていた。こうした不満は本書以前にも書かれており、地域志向型博物館に長くつきまとってきたようだ。しかし人は、地域志向型博物館論に込められた伊藤の事情とは無関係に、構造においてのみそれを受容してゆく。このことに由来する「混乱」であるから、本書でおこなわれたような「混乱」から逃れるための用語定義ではなく、なぜ「混乱」が起きるのか、「混乱」とは何かを問い、明らかにすることが、博物館研究には必要だったと思う。

本書刊行後の地域志向型博物館をめぐる事態について、亡き伊藤はなすすべがなかったが、すでに本書で「名前だけの地域博物館と、地域志向型博物館とは別物だ」［伊藤　1991：27］としていたことを考慮すれば、その展開が原理主義的なものとなったであろうことは想像に難くない。左様に、「名前だけの地域博物館」はサブカルチャー、大衆文化に伍しゆき、それとは「別物」の「地域志向型博物館」は「教養主義とサブカルチャー――欧米的なカウンターカルチャーとしてのサブカルチャー――とを結合させた」「ダブルスタンダード」［犬塚　2007：155］に活動の場を見いだし命脈を保つことになる。

これの一方で登場してきたのが、「現実にある来館者の体験を論証する試み」［橋本　1998：555］の要請である。これによって地域志向型博物館、第三世代の博物館をかかえた伊藤もまた、「来館者の体験」として「論証」される対象となった。理想の絶対は終わり、「美術館教育、ワークショップ、エコミュージアム、参加・体験、チルドレンズミュージアム、デジタルミュージアムなど」［金子　2001：７］1990年代のリストに加えられてしかるべきものとなる。そして、それはさらに棚橋源太郎、藤山一雄、木場一夫、鶴田総一郎と続いてきた博物館という観念の終わりをも意味することになってゆくのである。

（いぬづか・やすひろ　本研究科博士後期課程）

文献
⑴　赤松啓介　1977 「危機における科学」『考古学研究』第24巻第３・４号、考古学研究会、154-163頁。
⑵　橋本裕之　1998 「物質文化の劇場―博物館におけるインターラクティヴ・ミスコミュニケーション―」『民族学研究』第62巻第４号、日本民族学会、537-562頁。
⑶　犬塚康博　2007 「金子淳『博物館の政治学』」『千葉大学人文社会科学研究』第15号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、153-157頁。
⑷　伊藤寿朗　1991 『ひらけ、博物館』岩波ブックレット No.188、岩波書店。
⑸　金子淳　2001 『博物館の政治学』青弓社ライブラリー17、青弓社。